

(別紙の2)

自己評価および外部評価結果

[セル内の改行は、(Altキー)+(Enterキー)です。]

自己	外部	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
I. 理念に基づく運営					
1	(1)	○理念の共有と実践 地域密着型サービスの意義をふまえた事業所理念をつくり、管理者と職員は、その理念を共有して実践につなげている	住み慣れた地域でその人らしく生活が送れる様にホームと地域との関係性を大切にしている。月に一度のフロア会議やミーティングの際に理念に基づいたケアが行えているか話し合っている。職員研修でも理念について学ぶ機会を設けている。	法人の「その人らしく生き生き」という理念を大切にし、フロア会議やミーティングで職員間で理念について話し合い、具体的なケアにつなげている。リビングの誰にも見やすい場所に理念が掲示されている。理念にそぐわない言動が職員に見られた時は、その都度、管理者が言葉をかけて話し合うようにしている。	
2	(2)	○事業所と地域とのつきあい 利用者が地域とつながりながら暮らし続けられるよう、事業所自体が地域の一員として日常的に交流している	散歩や買い物時、地域の方々と顔を合わせる機会が多く、挨拶を交わしたりしている。千羽鶴を市役所へ届けたり、雑巾寄贈に近隣の小中学校、保育園、幼稚園を訪問している。コロナ禍でも、玄関先で渡すなど交流の機会を継続している。常会に参加し、三九郎、夏祭り、文化祭など地域の行事にも参加しているが、今年は行事が全て中止となり参加できなかった。障害者就労支援事業所の方が週一度清掃にきてくれている。	地元自治会に加入し、毎年、夏祭りや文化祭等の地域行事に参加しているが、本年は新型コロナウイルス禍のため中止となってしまった。そうした中、感染症対策をして市役所へ千羽鶴を届けたり、地域の幼稚園・保育園・小学校・中学校に出向き利用者手作りの雑巾を玄関先で贈呈するなど、例年通りの活動を続けることができたという。日常的な散歩や買い物の際に地域の方々とあいさつを交わし、野菜等の差し入れもいただいている。	
3		○事業所の力を活かした地域貢献 事業所は、実践を通じて積み上げている認知症の人の理解や支援の方法を、地域の人々に向けて活かしている	中学生の職場体験学習や福祉の職場体験事業、実習生の受け入れを積極的に行っているが、今年は体験学習等が中止になってしまい、感染症対策を取った上で実習生の受け入れを1組行った。		
4	(3)	○運営推進会議を活かした取り組み 運営推進会議では、利用者やサービスの実際、評価への取り組み状況等について報告や話し合いを行い、そこでの意見をサービス向上に活かしている	同じ法人のGHと合同で2ヶ月に1回開催している。議題に合わせて地域の代表の方をお呼びし、防災や事故、店舗のサービス等様々な意見交換を行っている。今年は、感染症対策を取った上で開催し、意見交換の場を作っている。	同じ法人のグループホームと合同で2ヶ月に1回、偶数月に開催している。本年は新型コロナ禍ということもあり2・4月は文書による報告で、6月より感染症対策をして会議を開くことができています。利用者、家族、民生委員、地域住民代表、市役所職員等のメンバーに加え、その時のテーマに応じて警察、消防、近隣店舗等の方にも参加していただき活発に意見交換し、充実した内容で開催している。会議のメンバーが更なる協力者となりサービス向上にも繋がっている。	
5	(4)	○市町村との連携 市町村担当者と日頃から連絡を密に取り、事業所の実情やケアサービスの取り組みを積極的に伝えながら、協力関係を築くよう取り組んでいる	市の介護相談員が2、3か月に1度訪問し交流を図っているが、今年はコロナの影響で受け入れは行っていない。認定調査の際は市の担当者へ利用者の暮らしぶりを伝え、連携を図っている。また、市の歯科衛生士とも連携を図り、歯科医師による訪問歯科検診や、口腔ケアの方法の指導などにも繋がっている。	認定更新時には市担当者に利用者の様子を伝えて連携を図っている。市の歯科衛生士とも連携して利用者の口腔ケアの相談窓口になっていただいている。介護相談員の定期的な訪問は新型コロナ禍ということで受け入れが中断しているが、平常時には情報交換できる良い機会となっている。	

自己	外部	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
6	(5)	○身体拘束をしないケアの実践 代表者および全ての職員が「介指指定基準における禁止の対象となる具体的な行為」を正しく理解しており、玄関の施錠を含めて身体拘束をしないケアに取り組んでいる	日中は玄関の鍵はかけておらず利用者が自由に行き来できるようにしている。屋外に出て気分転換を図ったり、畑に行かれ野菜を取りに行く方や花を摘みに行く方もいる。身体拘束に繋がらない様に利用者の気持ちを大切にケアができているか、フロア会議や日々のミーティングの際に話し合ったり、勉強する機会を作っている。3ヶ月に1度、身体拘束委員会を開催し、勉強会も行っている。	日中、玄関は開錠しており、自由に庭や畑に入出ししている。外出しそうな様子が見られたら止めるのではなく、一緒に散歩をしたり庭の手入れをして気分転換を図っている。3ヶ月に1回身体拘束適正化委員会があり、フロア会議では日頃のケアの場面に気になることを検討し拘束のないケアを目指している。	
7		○虐待の防止の徹底 管理者や職員は、高齢者虐待防止関連法について学ぶ機会を持ち、利用者の自宅や事業所内での虐待が見過ごされることがないように注意を払い、防止に努めている	職員研修にて高齢者虐待防止関連法について勉強会を行なっている。虐待に繋がるようなケアが行われていないかフロア会議等で検討したり、毎年ストレスチェックを受け職員の疲労やストレスが利用者のケアに影響が及ばない様にしている。		
8		○権利擁護に関する制度の理解と活用 管理者や職員は、日常生活自立支援事業や成年後見制度について学ぶ機会を持ち、個々の必要性を関係者と話し合い、それらを活用できるよう支援している	職員研修にて権利擁護に関する勉強会を行なった。成年後見制度のチラシを玄関に置き、家族等に情報提供してはいるが、活用できるような支援対策は万全とはいえない。		
9		○契約に関する説明と納得 契約の締結、解約又は改定等の際は、利用者や家族等の不安や疑問点を尋ね、十分な説明を行い理解・納得を図っている	契約時には、料金や看取り、医療連携体制等、時間を取って丁寧に説明し家族の不安や疑問等に応じながら同意を得る様にしている。介護報酬の改定や物価などの変動により利用料が増加する場合は、納得を得られる様に説明を行っている。		
10	(6)	○運営に関する利用者、家族等意見の反映 利用者や家族等が意見、要望を管理者や職員ならびに外部者へ表せる機会を設け、それらを運営に反映させている	家族の訪問時には、現状報告をするとともにさまざまな事や気になる事がないか思いを聞くよう職員から働き掛け、何でも言ってもらえる環境作りに努めている。遠方の家族にもホーム便りをお送りし日頃の様子等お伝えするようにしている。運営推進会議に家族も参加していただき、自由に意見や思いを伝えられる機会を作っている。昨年度は、家族アンケートを実施し、意見や要望を聞いた。	ほとんどの利用者が自分の思いや意見を表すことができる。うまく伝えられない時は表情や今までの関わりの中から思いを受け止めるようにしている。家族は2週間に1回～月1回とこまめに来訪されるが、新型コロナウイルス禍の本年は面会にも制約があった。利用者の様子は毎月の「こまぐさ便り」、季節ごとの「宮の前」や日常の写真で伝えている。定例の家族会はないが、日頃から何でも言っていただけ関係を築いている。	
11	(7)	○運営に関する職員意見の反映 代表者や管理者は、運営に関する職員の意見や提案を聞く機会を設け、反映させている	月一回のフロア会議には理事長も参加し、意見や要望、ケアの方向性等について話し合っている。職員の気付きやアイデアを会議やミーティングの場などで聞くようにし、日頃から職員間で話し合い、ケアに活かしている。	フロア会議は月1回、19時半から理事長も出席して開かれる。利用者の状況やケアプランの検討、行事内容等について活発に意見交換している。職員からの意見や要望を取り入れたりと、理事長からのアドバイスがあったりと検討した内容が運営に活かされている。職員は自己評価をし個別面談も受け、資質向上につなげている。	
12		○就業環境の整備 代表者は、管理者や職員個々の努力や実績、勤務状況を把握し、給与水準、労働時間、やりがいなど、各自が向上心を持って働けるよう職場環境・条件の整備に努めている	代表者も現場に来て、利用者と過ごしたり個別に職員の業務や悩みを把握する様に努めている。年1回自己評価を行い、職員が向上心を持って働けるよう働きかけている。また、職員が資格取得に向けた支援を行なっている。		

自己	外部	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
13		○職員を育てる取り組み 代表者は、管理者や職員一人ひとりのケアの実際と力量を把握し、法人内外の研修を受ける機会の確保や、働きながらトレーニングしていくことを進めている	外部研修の情報を収集し、なるべく多くの職員が受講できるようにしている。また、参加した研修報告は法人リーダー会議で伝達講習し、研修報告書を全職員が閲覧できるようにしている。		
14		○同業者との交流を通じた向上 代表者は、管理者や職員が同業者と交流する機会を作り、ネットワークづくりや勉強会、相互訪問等の活動を通じて、サービスの質を向上させていく取り組みをしている	研修や事例検討などを通して他事業者との交流を持ち、質の向上に励んでいる。同法人のグループホーム同士でもリーダー会議や運営推進会議を通して情報交換を行っている。		
II. 安心と信頼に向けた関係づくりと支援					
15		○初期に築く本人との信頼関係 サービスを導入する段階で、本人が困っていること、不安なこと、要望等に耳を傾けながら、本人の安心を確保するための関係づくりに努めている	事前に利用者家族と面談を行い、本人の心身の状態や生活環境を把握するように努めている。場合によっては入居前にホームで過ごす時間を設け、安心して頂ける様にしている。		
16		○初期に築く家族等との信頼関係 サービスを導入する段階で、家族等が困っていること、不安なこと、要望等に耳を傾けながら、関係づくりに努めている	家族には入居前にホームの様子を見ていただき、入居後グループホームとしてどのような対応ができるのか、生活やサービスについて事前に話し合いをしている。また、これまでのご家族の苦労や不安などをゆっくり聞き、信頼関係を作っている。		
17		○初期対応の見極めと支援 サービスを導入する段階で、本人と家族等が「その時」まず必要としている支援を見極め、他のサービス利用も含めた対応に努めている	サービス利用の相談時、本人や家族の思いや状況をよく聞き、面談を重ねる中で信頼関係を築きながらグループホームとしてどのような支援ができるか考え提案している。		
18		○本人と共に過ごし支えあう関係 職員は、本人を介護される一方の立場におかず、暮らしを共にする者同士の関係を築いている	職員と利用者は一緒に暮らしながら、喜びや楽しみ、不安や哀しみ、こだわりなどを共有し支え合える関係づくりに努めている。また、漬け物作りや料理、裁縫など教えていただく機会が多い。		
19		○本人を共に支えあう家族との関係 職員は、家族を支援される一方の立場におかず、本人と家族の絆を大切にしながら、共に本人を支えていく関係を築いている	本人の日頃の状態をこまめに報告、相談し支援の方法について共に考えている。コロナの影響で面会ができない時には日常の様子を写真に撮り送った。誕生日会やこまき祭りに参加して頂き、家族が本人や他の利用者に関わる場面作りをしている。		
20	(8)	○馴染みの人や場との関係継続の支援 本人がこれまで大切にしてきた馴染みの人や場所との関係が途切れないよう、支援に努めている	行きつけの美容院や歯医者、教会へ出掛けたり、SSに通う知人や家族に会いに行かれるように支援している。お盆や年末年始は自宅や子供の家に帰省し、一緒に過ごされる方もいる。また、年賀状を書く支援をしている。	新型コロナ禍という中にあり家族以外の訪問はないが、感染症対策をして行きつけのスーパーへ出かけたり、かかりつけ医の受診など、できるだけ今までの関係が継続できるように支援している。年賀状は利用者全員が作成し、家族や友人とやりとりが続けられるように支援している。	
21		○利用者同士の関係の支援 利用者同士の関係を把握し、一人ひとりが孤立せずに利用者同士が関わり合い、支え合えるような支援に努めている	個別に話を聞いたり、皆で楽しく過ごせる場面作りや一人ひとりが役割を持った活動を通して、利用者同士で助け合い、関係がうまくいくように職員が調整役となって支援している。		

自己	外部	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
22		○関係を断ち切らない取組み サービス利用(契約)が終了しても、これまでの関係性を大切にしながら、必要に応じて本人・家族の経過をフォローし、相談や支援に努めている	広報誌を送ったり、古新聞や農作物、漬物等をいただいている。来訪時には一緒にお茶を飲みお話しをしている。		
Ⅲ. その人らしい暮らしを続けるためのケアマネジメント					
23	(9)	○思いや意向の把握 一人ひとりの思いや暮らし方の希望、意向の把握に努めている。困難な場合は、本人本位に検討している	日々の関わりの中で、表情や言動などから本人の思いや希望、意向を汲み取るように努めている。意思疎通が困難な方には、1対1でゆっくり話を聞くようにし、ちょっとした仕草や表情の変化などから思いを引き出すようにしている。また、ご家族から話をお聞きしたり利用していた事業所から情報を得て本人本位の視点に立って検討している。	日々の関わりの中で、言葉や表情などから利用者の意向を把握するようにしている。自らの言葉で表すことが難しい利用者や遠慮がちな利用者には自分の思いを話せるように利用者と職員が1対1で会話をする機会を大切にし、家族からも情報を得るようにしている。職員は個々の情報をミーティングなどで出し合い、支援に役立てている。	
24		○これまでの暮らしの把握 一人ひとりの生活歴や馴染みの暮らし方、生活環境、これまでのサービス利用の経過等の把握に努めている	プライバシーに配慮しつつ、利用者一人ひとりの生活歴や馴染みの暮らし方、個性や価値観、サービス利用の経過等を本人、ご家族から話をお聞きし、情報を得るようにしている。また他事業所利用時の様子などを教えてもらえるよう連携を図っている。		
25		○暮らしの現状の把握 一人ひとりの一日の過ごし方、心身状態、有する力等の現状の把握に努めている	毎日の記録や24時間シートの中から利用者一人ひとりの生活リズムを理解している。日々の支援から一人ひとり今できることに注目し一人ひとりの有する力の把握に努めている。		
26	(10)	○チームでつくる介護計画とモニタリング 本人がより良く暮らすための課題とケアのあり方について、本人、家族、必要な関係者と話し合い、それぞれの意見やアイデアを反映し、現状に即した介護計画を作成している	本人やご家族との関わりの中での気づき、意見、要望などを反映した本人主体の介護計画にしている。フロア会議や日々のミーティングなどでモニタリング、カンファレンスを行い、本人、ご家族の要望や変化に応じて臨機応変に見直しを行っている。	職員は1～2名の利用者を担当しており、フロア会議で利用者の状況を報告し全員で検討している。毎月、全利用者の処遇検討をし、日々のミーティングでもモニタリング、カンファレンスを行っている。介護計画の見直しは3ヶ月に1回で、本人・家族の要望も反映させている。状態に変化が見られた時には随時見直し、変更している。	
27		○個別の記録と実践への反映 日々の様子やケアの実践・結果、気づきや工夫を個別記録に記入し、職員間で情報を共有しながら実践や介護計画の見直しに活かしている	出勤時、申し送りノートや個人記録を確認し情報を共有している。個別のファイルを用意し、食事、水分、排泄等身体的状況や日々の暮らしの様子や本人の言葉、エピソード等を記録し、介護計画の作成や見直しに活かしている。		
28		○一人ひとりを支えるための事業所の多機能化 本人や家族の状況、その時々生まれるニーズに対応して、既存のサービスに捉われない、柔軟な支援やサービスの多機能化に取り組んでいる	本人、ご家族の状況に応じて通院の付き添いや送迎、近隣のスーパーや薬局など個別的な買い物支援など柔軟に対応している。現在コロナの影響により、外出が難しくなっている。		

自己	外部	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
29		○地域資源との協働 一人ひとりの暮らしを支えている地域資源を把握し、本人が心身の力を発揮しながら安全で豊かな暮らしを楽しむことができるよう支援している	利用者が地域で安心して暮らし続けられるよう警察、消防、薬局、老人クラブ、教育機関、介護ショップ、地域交流センターマネージャー、消防防災設備会社、民生委員、地域住民、包括支援センター等運営推進会議に出席して頂き、意見交換、協力関係を築いている。本人、ご家族の希望により訪問理美容サービスや市の訪問歯科健診なども利用している。こまき祭りなどの行事の際、ボランティアの方々に来て頂いたり、地区の文化祭への出品や参加を通し、協力関係を築いている。現在コロナの影響により交流の機会が作れていない。		
30	(11)	○かかりつけ医の受診支援 受診は、本人及び家族等の希望を大切にし、納得が得られたかかりつけ医と事業所の関係を築きながら、適切な医療を受けられるように支援している	総合診療医、歯科医、婦人科医、整形外科医等本人、ご家族の希望するかかりつけ医となっている。受診は希望に応じてご家族付き添い、職員同行など柔軟に対応している。いつでも法人内クリニックに相談できる関係となっている。歯科医の往診を頼むこともある。	利用前のかかりつけ医を継続されている方もいるが、ほとんどの利用者は希望に応じて法人内のクリニックを利用されている。従来通りのかかりつけ医や内科以外の病院を受診する時は基本的に家族が付き添うが、職員が同行することもある。その際、ホームからはバイタル表などの情報を提供している。法人内のクリニックの看護師が週2回来訪して健康チェックや相談に応じており、24時間相談できる体制となっている。	
31		○看護職との協働 介護職は、日常の関わりの中でとらえた情報や気づきを、職場内の看護職や訪問看護師等に伝えて相談し、個々の利用者が適切な受診や看護を受けられるように支援している	体調や些細な表情変化を見逃さない様に努めている。変化等で気付いた事があれば、定期的に訪ねて来てくれる看護師に報告し、適切な医療に繋げている。また、24時間いつでも相談できる体制になっている。		
32		○入退院時の医療機関との協働 利用者が入院した際、安心して治療できるように、又、できるだけ早期に退院できるように、病院関係者との情報交換や相談に努めている。あるいは、そうした場合に備えて病院関係者との関係づくりを行っている。	4名の方が入院されたが、その際本人の情報等の提供を医療機関に行った。職員がお見舞いに行っている。また本人、ご家族、病院関係者と回復状況等、意見交換しながら、速やかな退院支援に結びつけている。今年はコロナ禍のため面会制限があり訪問できない為、電話等にてご家族、医療関係者と情報交換を行い、支援の継続について話し合っている。		
33	(12)	○重度化や終末期に向けた方針の共有と支援 重度化した場合や終末期のあり方について、早い段階から本人・家族等と話し合いを行い、事業所のできることを十分に説明しながら方針を共有し、地域の関係者と共にチームで支援に取り組んでいる	重度化した場合、早い段階から医師と家族の面談の機会を設けている。本人家族の意向を伺い、最後の時をより良く過ごして頂けるように医師、看護師、介護員で話し合い、連携を図り対応している。開設以来、13名の方の看取りを経験したが重度化した方のケアや終末期ケアは一人ひとり違い、難しいと職員全員が感じている。現在もターミナルケアで退院された方のケアについてフロア会議等で職員同士意見交換している。	利用された早い段階から、本人、家族、医師との面談機会を設けて重度化した場合についての意向を確認している。終末期に入り入院したり自宅に帰る方もいるが、開所以来13名、今年は1名の方の看取りを経験している。状況の変化に応じて医師、看護師、職員がチームとして話しを深め対応している。一人ひとりの終末期ケアには違いがあるが、経験したことを職員全員で共有し、今後も安心して最期を迎えられるように取り組んでいく意向である。	
34		○急変や事故発生時の備え 利用者の急変や事故発生時に備えて、全ての職員は応急手当や初期対応の訓練を定期的に行い、実践力を身に付けている	採用時研修で対応について勉強する機会を設けている。また、毎月のフロア会議やミーティング等で実際に起きた事故や予測されること、急変時の対応について話し合い勉強をしている。		

自己	外部	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
35	(13)	○災害対策 火災や地震、水害等の災害時に、昼夜を問わず利用者が避難できる方法を全職員が身につけるとともに、地域との協力体制を築いている	南、北ユニットそれぞれが出火した場合を昼・夜間を想定して、合同で年4回避難訓練を行った。うち1回は、近隣住民や民生委員の方々にも参加して頂き、消防署立ち合いで消火器による初期消火の訓練も行った。火災だけでなく、地震などの自然災害についても対策を考えていきたい。	年4回、利用者と共に避難訓練を行っている。両ユニット合同で出火場所や昼・夜を想定し実施している。そのうち1回は近隣住民や民生委員の方にも参加していただき玄関外に避難してきた利用者の見守りなどの協力をお願いし体制を整えている。また、消防署の協力を得て初期消火の訓練、避難経路の確認をし、全職員が避難誘導の方法を確実に身につけられるよう訓練を重ねている。	
IV. その人らしい暮らしを続けるための日々の支援					
36	(14)	○一人ひとりの尊重とプライバシーの確保 一人ひとりの人格を尊重し、誇りやプライバシーを損ねない言葉かけや対応をしている	ご本人の気持ちを尊重しながら、職員は人生の先輩として尊敬する姿勢を持ち接している。さりげないケアを心掛け自己決定しやすい声掛けをするように努力している。利用者の尊厳やプライバシー保護の大切さをフロア会議や研修で確認しあっている。	利用者に対しては、年長者としての敬意を払い接するようにしている。苗字に「さん」付けでお呼びしたり、以前の仕事柄「先生」とお呼びすることもある。毎日のケアの中では本人の気持ちを大切に考え、さりげないケアや言葉かけをしている。不適切な言葉が出てしまった時は職員間で指摘し合い、ケアについても確認し合っている。	
37		○利用者の希望の表出や自己決定の支援 日常生活の中で本人が思いや希望を表したり、自己決定できるように働きかけている	個々の方の状態に合わせ声掛けし、できるだけご自身で決定できるような支援をしている。表現が困難な方に対しては、行動や表情などからご本人の思いや希望を推察し支援している。		
38		○日々のその人らしい暮らし 職員側の決まりや都合を優先するのではなく、一人ひとりのペースを大切にし、その日をどのように過ごしたいか、希望にそって支援している	基本的な一日の流れは持っているが、個々の方のペースを大切に時々の気持ちを尊重し、その人らしく生活ができるよう支援している。ご本人の希望やサインを汲み取り、休んでいただくなど柔軟な対応に努めている。		
39		○身だしなみやおしゃれの支援 その人らしい身だしなみやおしゃれができるように支援している	着替える際は、ご本人がお好きな服(もの)を選んでいただいている。帽子やスカーフなども、気に入ったものを選んでいただいている。意思表示や自己決定のしにくい方には、職員と一緒に考え、本人の気持ちに寄り添った支援を心掛けている。		
40	(15)	○食事を楽しむことのできる支援 食事が楽しみなものになるよう、一人ひとりの好みや力を活かしながら、利用者と職員と一緒に準備や食事、片付けをしている	食事の準備や片付けをできる範囲でお手伝いして頂いている。誕生日会では、ご本人の希望のメニューを用意し、時には得意なものを調理していただきお祝いしている。日頃から職員と利用者が同じテーブルを囲み食事を楽しむ雰囲気作りを大切にしている。両ユニットで季節ごと行事を開催し、食事やおやつを楽しむ機会も作っている。	食事の介助を必要とする方は若干名で、食形態は嚥下状態を見ながら刻みやソフト食に対応している。メニューは法人本部の栄養士が立て、昼・夕食のおかずは本部で調理されている。ごはん、汁物と朝食はホームで調理している。半数の方が調理、盛付け、片付けに関わっている。誕生日には特別メニューで希望の料理を作り楽しんでいただいている。職員も利用者と同じテーブルにつき楽しい食事になるよう雰囲気作りに努めている。訪問時、収穫祭に向けて畑でとれた大根を調理し、おでん作りに取り組んでいる利用者の姿を見ることができた。	
41		○栄養摂取や水分確保の支援 食べる量や栄養バランス、水分量が一日を通じて確保できるよう、一人ひとりの状態や力、習慣に応じた支援をしている	チェック表を利用し水分量、食事量の把握をしている。個別に高カロリー補食品を用意したり、食事形態をソフト食にするなど、対応している。個々の食事量や食事の時間、好き嫌いに合わせ柔軟に対応している。		

自己	外部	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
42		○口腔内の清潔保持 口の中の汚れや臭いが生じないよう、毎食後、一人ひとりの口腔状態や本人の力に応じた口腔ケアをしている	利用者一人ひとりに応じた対応を行っている。特に就寝前の口腔ケアは、重要性を理解し、利用者によってはスポンジやガーゼを使用し口腔ケアを行っている。歯科衛生士に口腔ケアの訪問指導を受け、食べ続けることができる支援に努めている。		
43	(16)	○排泄の自立支援 排泄の失敗やおむつの使用を減らし、一人ひとりの力や排泄のパターン、習慣を活かして、トイレでの排泄や排泄の自立にむけた支援を行っている	一人ひとりの排泄サインを察知し、自尊心を大切にしながら支援を心掛けている。排泄チェック表を活用し、一人ひとりの排泄パターンを把握し尿意の無い方でも時間を見計らって誘導をするなど、トイレでの排泄ができるよう支援をしている。メーカーのケア・アドバイザーに適時相談しながら、パットの選択や当て方など利用者に合わせてケアを検討している。	自立している方は数名で、あとの方は声かけや介助をトイレでの排泄を支援している。利用者にあわせてパンツやパットを使用している。排泄チェック表を使用してさりげなく声かけや誘導を行っている。メーカーのケアアドバイザーにも相談しながら排泄の自立に向けて勉強会を行い、ケア用品についても一人ひとりに合わせ検討している。	
44		○便秘の予防と対応 便秘の原因や及ぼす影響を理解し、飲食物の工夫や運動への働きかけ等、個々に応じた予防に取り組んでいる	繊維質の多い食材、乳製品などを取り入れたり、水分を多めに採っていただいている。排便チェック表を活用し、看護師と連携しながら本人に合った便秘薬を処方して頂くなどの支援をしている。また、体を動かしたり、ホットタオルやマッサージを行い腸の動きを良くする事で、自然排便に繋がるよう支援している。		
45	(17)	○入浴を楽しむことができる支援 一人ひとりの希望やタイミングに合わせて入浴を楽しめるように、職員の都合で曜日や時間帯を決めず、個々にそった支援をしている	これまでの生活習慣や希望に合わせて入浴できるよう、湯量や温度、時間帯など個々に合わせたケアを心掛けている。入浴が好きでない方も少なくとも週2回は入浴して頂ける様、声掛けの仕方などを工夫している。好みの入浴剤を選んでいたり、季節の菖蒲湯やゆず湯を楽しんで頂くようにしている。	一人で入浴できる利用者はわずかで、見守りや一部介助を必要とする方が多い。入浴日や入浴剤など、利用者の希望に沿うようにしている。毎日入浴される方もいるが、週2回は入浴している。入浴を嫌がる方には声かけを工夫し、自然に入れるように働きかけている。	
46		○安眠や休息の支援 一人ひとりの生活習慣やその時々状況に応じて、休息したり、安心して気持ちよく眠れるよう支援している	午前中リハビリ体操をし、午後近くの公園、施設の周囲を散歩したりして、生活のリズムを整え、夜間の安眠に繋げられるよう心掛けている。眠れない方には会話をしたりホールでゆっくり過ごして頂いたり、温かい飲み物をお出ししたりしている。		
47		○服薬支援 一人ひとりが使用している薬の目的や副作用、用法や用量について理解しており、服薬の支援と症状の変化の確認に努めている	個別に服薬ファイルを作成し、全職員が把握できるようにしている。服薬は個別に対応し、薬のセッティング時、準備時、配薬時と複数回確認している。服薬時間違いの無いよう本人確認をし、飲み込みまで確認している。処方の変更や追加があった場合は申し送りノートや個人記録に記録したりミーティングで確認し合ったりしている。フロア会議などで薬に対する理解を深めている。		

自己	外部	項目	自己評価	外部評価		
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容	
48		○役割、楽しみごとの支援 張り合いや喜びのある日々を過ごせるように、一人ひとりの生活歴や力を活かした役割、嗜好品、楽しみごと、気分転換等の支援をしている	畑仕事や洗濯物干し、洗濯物たたみ、食器洗い、お椀拭き、みそ汁やおやつ作りの手伝い、食事の盛り付け、掃除、新聞たたみ、刺し子、雑巾縫い、花の苗植え、水やり、ぬり絵など得意なことや利用者の経験や知恵を発揮できる場面を多く作りその都度感謝の言葉を伝えるようにしている。行事や外出、誕生日会には利用者と相談しながらお好きな料理、ケーキなど希望に添って用意し、計画し楽しみながら日々過ごせるよう支援している。			
49	(18)	○日常的な外出支援 一人ひとりのその日の希望にそって、戸外に出かけられるよう支援に努めている。又、普段は行けないような場所でも、本人の希望を把握し、家族や地域の人々と協力しながら出かけられるように支援している	施設の周囲や近所の公園への散歩は午後の日課になっている。健脚の方には車椅子を押して頂いたり助け合って楽しんで頂いている。コロナ禍で控えていたがコロナ対策をしっかりと近所のスーパー、薬局などへも出来るだけ外出して頂いている。自宅に帰られたり教会に出掛けられたり、花見、バラ園見学、ぶどう狩り、紅葉狩り等へも出掛け、四季を楽しんで頂ける様にしている。	天気の良い日は毎日、ホーム周辺や近くの公園まで散歩することが午後の日課となっている。新型コロナウイルス禍でも感染症対策をし、近所のスーパーや薬局に買い物に出かけている。季節の行事の花見(バラ、アジサイ)、ぶどう狩り、紅葉狩りなどに、ユニット毎で出かけている。半数の利用者は車いすを利用し、杖やシルバーカー、車いすを押し歩くなど、積極的に外出している。外出できない時はウッドデッキに出て外気浴を楽しんでいる。		
50		○お金の所持や使うことの支援 職員は、本人がお金を持つことの大切さを理解しており、一人ひとりの希望や力に応じて、お金を所持したり使えるように支援している	家族の協力を得て個人の財布を持っている利用者もあり、職員と買い物に出掛けた際、飴や菓子、雑貨、花などちょっとした好みの買い物を楽しんで頂ける様にしている。			
51		○電話や手紙の支援 家族や大切な人に本人自らが電話をしたり、手紙のやり取りができるように支援をしている	携帯電話を持っておられる利用者もおられ、本人が家族に電話を掛けたり、又家族と話したいという利用者には電話を取り次いだり、家族からの電話にもプライバシーに配慮しながらゆっくりとお話し頂いている。利用者から依頼され手紙を投函したりしている。又、職員と一緒に年賀状を出したりしている。			
52	(19)	○居心地のよい共用空間づくり 共用の空間(玄関、廊下、居間、台所、食堂、浴室、トイレ等)が、利用者にとって不快や混乱をまねくような刺激(音、光、色、広さ、温度など)がないように配慮し、生活感や季節感を採り入れて、居心地よく過ごせるような工夫をしている	利用者にとって馴染みの物、生活感や季節感のある物を配置し家庭的な雰囲気作りに努めている。刺し子や絵、塗り絵など利用者の作品を飾ったり季節に合った花を飾るなどして居心地の良い雰囲気作りに努めている。	玄関、リビング、キッチン、和室と木材がふんだんに使われているため、木のぬくもりが感じられ色合いも落ち着いた。廊下の壁には利用者の作品が飾られている。ちょっとしたスペースには観葉植物や花が置かれて季節を感じさせてくれる。リビングのソファや和室には炬燵が置かれ、利用者同士が楽しく歓談されている。ウッドデッキがあり自由に出入りして日向ぼっこなどが楽しめるようになっている。		
53		○共用空間における一人ひとりの居場所づくり 共用空間の中で、独りになれたり、気の合った利用者同士で思い思いに過ごせるような居場所の工夫をしている	リビングにはソファ、畳スペースには炬燵があり気の合った利用者同士座って話が出来たり、気軽に休んで頂ける場所となっている。ウッドデッキにも椅子を用意し、外気に触れながら景色を眺め日向ぼっこなど楽しんで頂ける様にしている。			

グループホームこまくさ野村宮の前・南棟

自己	外部	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
54	(20)	○居心地よく過ごせる居室の配慮 居室あるいは泊まりの部屋は、本人や家族と相談しながら、使い慣れたものや好みのものを活かして、本人が居心地よく過ごせるような工夫をしている	馴染みの家具や仏壇、テレビ、寝具など好みの物を自由に持ち込んで頂いている。家族の写真や利用者が作った作品を飾ったり摘んできた花など飾ったりして利用者一人ひとりの居心地の良い空間となるよう努めている。	居室には洗面台と収納タンスが備え付けられている。自宅で使い慣れた家具や寝具、ハンガーラックなどが持ち込まれ、そこに家族の写真や思い出の品、手作り作品が飾られ、それぞれに居心地の良い居室となっている。	
55		○一人ひとりの力を活かした安全な環境づくり 建物内部は一人ひとりの「できること」「わかること」を活かして、安全かつできるだけ自立した生活が送れるように工夫している	利用者の身体状況に合わせて、トイレ表示やL字パー使用など安全に安心して暮らせるよう環境整備に努めている。車椅子、歩行器などの接触事故のないようリビングのテーブル配置、置き場所などにも気を配り安全に心掛けている。		